

鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター創設10周年記念企画

鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター第5回公開セミナー

創立者シスター江角ヤス

基調講演 「創立者シスター江角ヤス先生」

前純心学園教諭

山長 豊實

日 時:2012年2月24日(金) 14:00～16:30

於 :サンタマリア館 階段講義室

【司会】キリスト教文化研究センター第5回公開セミナーに、ようこそ、おいでくださいました。この度は鹿児島純心学園の創立者、江角ヤス先生の思い出を話していただくために、長崎から山長豊實先生にお越しいただいております。本当にはるばる、お寒いところを、おいでいただきましてありがとうございます。では早速、始めさせていただきます。このセミナーは同時に大学のFD・SDのための教職員研修としても指定されておりますので、最初に学長から、ごあいさつをいただきます。

【学長】皆さま、こんにちは。本日は、キリスト教文化研究センターの公開セミナーにご参加いただきまして、心より感謝を申しあげます。今回の公開セミナーは、本学のキリスト教文化研究センターの創設10周年を記念して、また、建学の精神の原点に戻り、本学のキリスト教的人間教育を共に考える機会を持つことを願って企画されたものでございます。また、本学の教職員の皆さまにつきましては、FD・SDの研修の機会として企画されております。

このたびは、長崎の純心学園で長年にわたり、創立者、江角ヤス先生の薫陶を親しく受けられた山長豊實先生にお越しいただき、「創立者、江角ヤス先生」と題して、教育者としての在りし日の江角ヤス先生を語っていただくことになりました。山長先生、遠いところ、ようこそ、鹿児島純心女子大学にお越しくださいました。ありがとうございます。先生と久しぶりにお会いし、また、江角先生のお話を伺うことを楽しみにしておりました。

私事でございますが、先生のご在職中、高校2年と3年のときに英語を教わりました。英語が苦手だった私が、その時間を楽しみにして勉強するようになったことを覚えております。先生には英語の教科はもちろん、それ以外でも、人として、また、純心の生徒としてのあるべき姿や、必要なことをわかりやすく教えていただきましたことが印象に残っております。今、思いますれば、山長先生は、学園長であられた江角先生の心を心として、私たちを指導してくださっていたのだと思います。

先生は教員としても、同僚の先生方からの信頼が厚く、先生の周りには、いつも明

るく穏やかな空気が流れていたように思います。また、責任ある任務を数多くつとめられ、学園の中心的存在として活躍されました。純心学園を退職なさったあとでも、さまざまな活動にチャレンジされ、必要とされるには喜んで出かけ、奉仕されていらっしゃるということを伺っておりました。

ここにお集まりの皆さま方は、創立者と共に過ごされた経験をお持ちでない方がほとんどだと存じます。ご紹介しましたとおり、山長先生は長年、江角先生の下で勤務され、教育者として確固たる信念で生きられた江角ヤス先生の姿と心を語っていただくのに、最もふさわしい方でございます。先生のご講演が、私たちにとりましても、創立の精神に触れる機会となり、新たな力を得て、カトリックの女子大学として確かな足取りで進むことができればと願っております。

まだ十分、先生のことをお伝えできていないかと存じますが、講演のなかで、皆さま方、それぞれ感じ取っていただければと存じます。簡単ではございますが、開会のあいさつとさせていただきます。山長先生、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

【司会】ありがとうございました。つづきまして、キリスト教文化研究センターの副所長でございます岡村教授に、講師の先生のご紹介をお願いいたします。

【岡村】本日の講師の先生であられる、山長豊實先生のご紹介をさせていただきたいと思います。先生は、1930年に四国、高知市にお生まれになり、お父さまのお仕事の関係で、4歳のときに朝鮮へ渡られました。1945年、終戦ののちに、朝鮮半島より日本へ引き揚げられ、長崎県立高等女学校へ入学されました。1947年に、その高等女学校を卒業されたあと、長崎県立女子専門学校、現在のシーボルト大学の英文学科へ入学されました。1950年にその専門学校を卒業後、助手として同じ学校に勤務されましたが、その翌年には退職をされ、純心女子学園に英語科教員として勤務されることとなります。

その後、1993年に退職されるまで、40年以上も純心学園でお勤めになりました。純心学園を退職されたあとは、1993年に、英国暁星学園、ロンドン近郊の日本人学校だそうですが、そこで英語科教員として勤務しておられます。1995年に帰国されたあと、1996年から1999年まで、純心女子短期大学、および純心高校で非常勤英語講師として、また教鞭を執られました。本日は、純心女子学園の教諭として、着任当初から江角ヤス先生と交流があり、親しく薫陶を受けられたということで、山長先生のお話を通して、創立者、シスター江角ヤス先生の人となりや、少しでも垣間見ることができるのではないかと楽しみにしております。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

基調講演 「創立者シスター江角ヤス先生」

ご紹介いただきました山長でございます。こういうおこがましい、ちゃんとした大人の方々にお話をさせていただくということは、まったく慣れておりません。常に学校で生徒さん相手でしたので、今、少々、頭がヒラヒラしておりまして、落ち着かなければと思っております。このお話のご依頼をどうしようかと思いながら、お引き受けいたしましたのは2つの理由からです。それは、私は本当に今までかなりの人生を歩んできましたけれども、私が、ご縁があって純心に勤めさせていただいたことは本当に有り難いことだったと思っております。本当にたくさんのお恩恵を受けました。その純心からのご依頼であること。それからもう一つは、それ以上に、やはり江角先生のことであるから。

いろいろなお話を伺っていると、江角先生を、もう直接存じ上げている方がだんだん少なくなっているのです。私のところに純心の元同僚の仲間、友達がしょっちゅう来ていますが、江角先生に、校長先生としてお世話になっている人は、1人か2人ぐらいですね。あとはいろいろ、たくさん見える方はみんな松下校長先生の時代で、もちろん、松下校長先生もご立派な、本当にいい校長先生でしたけれども、江角先生で言うと、時々、錬成会で三ツ山に行くと、錬成会で生徒のお世話をしてくださる。あるいは、放送朝礼というのがありまして、江角先生が朝の朝礼を放送で、1カ月に一遍か、何週間かに一遍か、もう忘れましたが、皆さんそれぐらいで、あとは大きな行事のときに時々、お目にかかる程度で、もうご存じないんですね。

そういうことを考えますと、やはり江角先生のことを知っているというより、私は江角先生を校長先生として、叱られ、叱られ、なんにも訳のわからない教員で、江角先生のおっしゃることを、ときには何を言ってるんだろうとか思いながらも、とにかく7、8年、10年近く、江角先生にご指導いただいてきた。そういう人が本当に純心の関係者のなかにも少ない。なんの価値もない人間でも、たまたま江角先生のご指導を直接いただいた人間として、たぶんこれが最後になるでしょうけれども、江角先生のことを、やはり私が知っていることを、できることはお伝えするほうがいいのではないかなという、その2つの理由でこれをお引き受けしました。

ただ、お引き受けしましたのは去年のことだったので、まあ、いいやと思っていたのですが、だんだん、だんだん、年が明けて1月になり、2月になると、口や体はでっかいことを言っている、気は小さくて、もう本当にこの1週間ぐらい、落ち着く暇もない日々を過ごしてまいりまして、とにかく今日、皆さまの前で、本当にどんなことがお話しできるのかわからないのですが、お礼の申しあげようもないぐらいお世話になった先生のことを少しでも皆さまにお伝えできたらと思います。

もちろん、江角先生も人間でいらっしゃいますから、私、江角先生を校長先生とし

ては10年近く、ご立派な先生とは思っていても、もうとにかく、腹が立って、腹が立って、なんていう校長先生だろう思ったこともあるので、そんな絶対的に、もう江角先生様と言って過ごしたわけではございません。そこが江角先生の江角先生たるところで、ときにはとんでもないむちゃもおっしゃったりして、大変、面白い方でいらっしやいました。そういうことで客観的にというか、今振り返ってみると、江角先生というのは、やはり校長先生としてすごかったなと思う他に、とにかくやはり抜群の力をお持ちだったと思います。

私が勤めだして何年かたったころに、三ツ山に植林をするから、生徒と一緒に作業に行くようにと言われまして、高校3年生、錬成会と称しまして、植林に来て、そのあと、なんかかんか、三ツ山での作業が付いていったように思います。そのころからその三ツ山に原爆ホームをつくったり、それから純心の大学をつくったりというお考えがあったのだと思います。まだ私たちが来たころは、なんにもない山でございました。バスも途中までしか来ないので、犬継というところからは、てくてく歩いていたのですが、ホーム、福祉施設においでになった方が想像なさるような丘ではございませんでした。なんにもない山で、そこで木のない禿げているところには植林をし、変なもの伐採し、とにかく今のようなものになったんですけれども、そういう企画力というのか、こんな三ツ山なんかで大学をつくって生徒が行くものかと、初めは思ったこともあります。

そのころまでは、文教町の今の純心高校の校舎に短大も同居しておりました。校舎を二分にしたのか、ここから向こうは短大だということで、片岡弥吉先生もそこにおられて同居していたのです。それが三ツ山に純心短大ができたから、三ツ山のほうに行くことになったときに、私も含めまして周囲の仲間たちは、あんな山の上に短大をつくって、長崎弁で言いますと、誰が行くかしら、何さねとかなんか、ここにある学校のほうがいいのにと言って、短大生がいなくなると広がるから、それは私たちにっては有り難いんですが、非常に心配しておりました。ああいうところにつくって大丈夫かしら。

ところが、ふたを開けてみたら、そのころ長崎においでになったシスターもおわかりだと思いますが、そのころは短大でしたが、純心短大は以前にも増して力が増していったのです。高校生にも人気が出て。それはあとから考えたらよくわかるんですね。やはり、いやしくも高校生として、大学の学生さんになったときに、高等学校の生徒と同居して、同じ校舎のなかにいるということは、やはり居心地がよくなかった。精神的にやはり嫌だったんだろうなと思いました。

そういうことがあって三ツ山に移ってから、純心短大は、私たちの心配をよそに、本当に伸びていったような気がいたします。私たちの高校から純心短大にたくさん来

ていただかなければならなかったので、純心短大の問題は、本当に絶えず私たちも聞いておりましたが、確かに三ツ山に移ってから、非常に精彩を増していったような気がいたします。だから江角先生というのはやはり、そういう意味で洞察力が本当に、私たちにはないようなものを持っていらしたんだと、あのときにつくづく思った次第です。

何を話しているのかわからないのですが、私は、江角先生のいろいろな、私たち並みの人間ではできないようなことですね。学校の発展から福祉事業に至るまで、それから海外のブラジルとか、そういうのを拝見していて、すごいなと思っていたのですが、江角先生のどこからそういうものがはぐくまれて、今のような活動をしていらっしゃるのかなど、何度か友達とも話したことがあります。今になって思えば、江角先生を江角先生にたらしめたのはなんだろうかと、このあいだから思っていて、今の江角先生の一番根幹になった、基になったのは、やはり江角先生の学問ではなかったかなと思います。

そういうことを言うと、そんなことないと思われるかもしれませんが、江角先生は、当時としては本当にすごい高等教育を受けられました。斐川町の本場に片田舎にお生まれになった方が、女子師範、確か出雲にあったと思うのですが、そこに行かれ、それだけでもあのころは本当に容易ではなかったと思いますが、師範を卒業したあと、東京の、今のお茶の水女子大、当時の女子高等師範ですね。そこに進学なされ、さらに東北大学に行かれる。今は男の子も女の子も同じように大学へ行けますから、お茶の水女子大というと、レベルが高いことはわかっている、べつに、ああ、というところではないかもしれませんが、当時は、女子の高等教育を受けられる学校というのは、東京女子高等師範学校ですか、それから奈良の女高師と、2つだけだったと聞いております。ですから、それ以外は、ほとんどなかったのです。女子大、もちろん、国立大学は東北大学がわずかに、何名かの生徒を迎え入れるという程度で、女の人にとっては非常に門戸が狭かった。そのときに東京の女子高等師範に行かれたというのは、やはりこれは大変なことだったと思います。

私が純心に勤めだしたころに、私の同僚で、東京の女子高等師範、旧制の最後の卒業生ぐらいの方がみえました。そのころ純心におられた方はご存じかと思いますが、化学の先生でしたが、その方は新潟県の佐渡という島の高校を出て、東京女子高等師範学校に進学されたのです。旧制です。そうしたら、新潟県の地元の新聞にでかかど載ったんだそうです。佐渡島というのものもあるでしょうが、新潟の新聞になんたる快挙かと載ったというのです。昭和ですよ。昭和20年代ですよ。でも、それぐらい、やはり佐渡のようなところでは、お茶の水というのは、とにかく画期的なことだったんですね。

まして大正年間ですから、江角先生が、私も伺ったことがあります、静かな小さな村の出身のお嬢さんが東京の女高師に行かれるというのは、もう本当に、どれぐらいみんなが騒いだかなんていうことは存じませんが、とにかくそれは画期的なことだったと思います。そうやって東京の女高師に行かれ、そして次いで東北大学に行かれ、そこでキリスト教との出会いがあるわけですから、まさに江角先生のなかで、もっとももっと伝統的な学問の道に進まれたことが、やはり江角先生をキリスト教へといざなっていかれた。いきなりぼんとキリスト教が現れたわけじゃないんですね。なんかそんな気がいたします。

その学問と、そしてキリスト教と、もう一つ、江角先生をさらに大きな方向付けをしたものが原子爆弾だったと思います。私はこの江角先生の学校運営の意欲と、それからキリスト教と原子爆弾、その3つのうちのどれがなくても、今のような江角先生のキャリアはなかったのではないかなと思うのです。とにかく、学問は知的な面での江角先生への働きかけであり、カトリック、キリスト教との東北大での出会いは、江角先生の精神、信仰の面で非常に、新しい生命を得るぐらいの大きなできごとであり、そして、長崎での原子爆弾というのはまた、何もかもすべてを変えてしまうぐらいの大きなできごとであった。この3つが、江角先生のお仕事に非常に大きな影響を持っているような気がいたします。

とにかく江角先生は、私がまず思い出すのは、意外かもしれませんが、あなた、勉強しなさいという言葉でした。とにかく勉強しなさい、勉強しなさい。学ぶことを、とにかくお勧めになりました。これは意外に思われる方があるかもしれませんが、あなた、勉強するのよ。あなた、本物を勉強するのよ。それをもう何度伺ったかわかりません。学ぶこと、純心の標語に、「優しく、賢く」というのが、いつごろからかありますが、賢くということも、やはり江角先生のお気持ちがよく表れているような気がいたします。女性は賢くなければならない。賢くありなさい。これはもう江角先生から何遍も伺いました。

なぜならば、女性は人の母になるのだから。お母さんは賢くなければいけないというのです。これが江角先生のお気持ちでした。だから、ただ優しくればいいとか、心根がよければいいというだけではなくて、やはり賢いことを江角先生は、片一方のほうで、非常にこれは熱っぽく語られたのを覚えております。したがって、私にもよく勉強する機会を与えてくださいました。私が勤めだして2年目ぐらいのときでしたか。英語の講座が東京の慶応かどこかで、英文学の講座があって、行きたいなと思いましたが、純心はまだそんな研修に出していただけるほどのお金はない、余裕はない時代だったように思います。どうしようかなと思っていたら、ある日、夏休みの前に江角先生が、あなた、東京の研修に行きなさいと、命令でおっしゃったのです。私は、

わあ、なんかなと思って、きっと英文学関係だと思って喜びかけたら、上智大学のキリスト教講座、神学講座です。神学ですから、キリスト教なり、神様のこと、上智大学の神学講座は5日間あるのです。それに行きなさいとおっしゃった。

私は正直言って、行きたくありませんでした。プログラムを見たら、みんな神父様の講演なのです。午前中に2人、午後に1人あって、それが5日間続くのです。夏休みの暑いときです。私ももう本当に、洗礼はそのときに受けていたのですが、正直言って行きたくありませんと言ったら、江角先生というのは、そういうところにとても本当によく気が付かれるのです。あなた、英語かなんかの研修にも行かせてあげるわよとおっしゃったのです。それに行けば、こっちも行ける。幸いに日にちがちよとずれていて、全部ではないのですが、行けるんです。私はやったと思って、こちらに行けるのなら、まあ、こちらも行くかと思って、悪いんですけども。その代わり、お金がないから、旅費と受講費は出してあげるけれども、宿泊代は出ないと。だから田園調布の小さき花の幼稚園に泊まりなさい。そこから上智大学に通うのよとおっしゃって。私も若いですから、そんないいホテルに泊まろうなんて、全然ありませんでした。

そのころはまだ日本も貧しい時代でしたから、とにかく欣喜雀躍で喜んでいまして、本当はその英文の講座が聴けるのがうれしかったのですが、先に上智大学のがあったのです。そこに行きましたら、本当に私、圧倒されたのです。私はふにゃふにゃの信者でしたが、こんな奥深い、そして退屈しない、そして豊かな話があるだろうかと思いました。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、そのころの講師はイエズス会の神父様とかでした。ご存じでしょうか。もうお亡くなりになりましたが、イエズス会のホイヴェルス神父様とか、それから『偉大なる人間』とかを書いていた神父様とか、それからパリミッション会のカンドウ神父様とか、そうそうたる神父様だったのです。

私はなんにも知らないで、神学講座ってなんか辛気くさいなと思って行ったんだけど、とにかくそのホイヴェルス神父様の中身の深さというか、温かさというか、日本語も流ちょうでいらしたけれども、とにかく圧倒されましたし、そのカンドウ神父様に至っては、目をつむって聞いていたら、ちゃきちゃきの江戸っ子がしゃべっているような日本語なのです。べらんめえ口調の。フランスの方でしたが、なんか横浜に来て、その当時は、人力車というのをご存じですか。人力車というのがあって、その人力車の方に日本語を習ったというのです。まだ明治年間でした。ですから、とにかく言葉がもう、私たちよりも日本人っぽいというか、江戸っ子なのです。私たちはあんな言葉を使いません。長崎と九州の日本語ですが、もう本当に目をつむって聞けば、どこの人と話しているのかと思うぐらい。そしてお話が面白くて、話題が豊富で、

世界中のことを話してくださって、その4日間か5日間の神学講座というのは、お世辞抜きで、私は、始めは本当に渋々行ったのですから、正直なところ、本当によかったのです。毎日、田園調布から渋谷に出て上智まで通って、本当に楽しかったのです。そのあとで英語の講座も受けて帰って、江角先生に上智大学の神学講座がよかったということで、それはもう本当にお礼を言って報告しました。そのとき江角先生が、そうよ、山長さん、なんでもね、本物をね、本物をちゃんと聞かなきゃだめなのよとおっしゃったのです。

べつに他の方が偽物というわけではないのですが、やはりそれぞれのものにはレベルというものがあって、その当時、そのとき私が上智大学で伺った神学講座というのは、本当にレベル1だったのです。よくわかりませんが。批判ばかりしているような私なんかでも、とにかく圧倒された5日間だった。そのときに、本物をやる、本物をちゃんと見つめなければいけないよということをおっしゃってくれた。私はあの貧しい時代に、宿泊費は出せないといいながら、受講費と旅費は出してくださって、そして田園調布の幼稚園に泊めてくださって、それでも勉強をなさいとおっしゃってくださったことを本当に、そのときも有り難いと思いましたが、今、つくづく有り難いと思っています。

そのときに、私と同じころに入った体育の女教師がいました。この体育の女教師というのは、長崎純心にご縁のある方はご存じと思いますが、高体連の高総体で、器械体操を25連勝、25年間、県で優勝させた、とにかく優秀な教師です。25連勝というのは、おぎゃあと生まれた子どもが25歳になるまで毎年勝っているのです、長崎の純心が。それぐらいの先生ですが、私とほぼ一緒のころに純心に入りまして、その人と2人、田園調布の修院にお世話になりました。幼稚園の園児の机を並べて、その上になんか敷物を敷いて、本当に申し訳ないのですね、机の上に寝るのですから。幼稚園の机は低いですから安全ですが、でも不平を言うならば、痛いんですね。そこに1週間ぐらい寝かせていただいて、お食事もさせていただいて、宿泊費がないからごめんなさいねと、江角先生はおっしゃいましたが、まあ、お金のない時代に、よくあんなふうにして勉強をさせてくださったなど、そのときも思いましたが、今やはり。

本当に勉強をなさいとおっしゃり、勉強をさせる方です。そして、いかげんなものではなくて、勉強をするなら本物を勉強なさいということをおっしゃいました。純心高校に私はずっと長くおりましたが、よく県とか、あるいは私立の大学から、夏休みなんかには研修会の案内が回りますよね。全部行っていたら切りがないのですが、でも長崎の純心は、本当にあとから考えてみたらよく出してくださったと思います。県から通知が来る、いわゆる英語教師の研修会というのは、半ば、行くべきなのでしょうが、あとでいろいろな私立大学とかが来るのです。そういうのは、まったくほかし

ていいのですが、そういうところもよく出してくださいました。

私と10歳違う理科の先生が赴任してきて、たまたま沖縄で、まだ沖縄が復帰した直後ぐらいでしたか。沖縄でなんかすごい研究会があるから行きたいと言われた。その年の4月に入られて夏休みなんですね。そしたら、同時に入られた物理の先生、2人仲が良かったのですが、同じ理科だから自分も行きたいと。2人が行きたい、行きたいと言って、校長は松下先生でしたが。普通、この人たち、4月に入ったけど、ずっと純心にいるものなのか。来年になったらどこかへ行くものなのか。長崎というのはわりとこういう思考が強いですから、まだわからないわけです。そんなときにその2人がそう言ったのです。私はあとから考えたら、随分、厚かましいなと思いました。4月に来て、7月にもう沖縄まで研修に行かせてくれなんて、文部省の指令でもなんでもないんですね。ただ沖縄がやっていた。そしたら、行ってもよろしいとおっしゃったのです。松下先生だったと思います。ただし、2人は出せないわと言われて、その2人は仲良く、1人分を2人で分けて、あとは自費で行きましたが、私はそのとき、純心は勉強をさせる学校だなと思いました。普通、やはりたった1人でも、沖縄に5日間か、それぐらいでしたか行って、そのころはきちんと出張の旅費からなんから出る規定がありましたから、出してくださるわけです。ですから、それを出すというのは、かなりの負担だったと思うのですが、そういうのを来たばかりの先生にけちけちなさらないのです。1人は結婚して辞めましたが、そのうちのもう一人の人は、しっかり定年まで、女性ですが、勤めましたから、大変、松下先生もお喜びだと思います。本当に有り難いと、その人も言うておりました。そのとき、やはり勉強をなささいとおっしゃって、させてくださったと思います。これはやはり江角先生の持論だったのです。勉強をするというのは。

すぐに江角先生について私が思うのは、人を大切にすることをおっしゃっていました。江角先生は人とおっしゃいませんでした。人様とおっしゃるのです。人様を大切にとおっしゃった。そしてなかでも印象的だったのは、純心の校門に入ってこられる方は、誰でも純心に何かのためになることをしてくださる方だから、丁寧にお辞儀をするのよとおっしゃっていました。純心に来る人って、いっぱいいるわけですね。学校関係もあれば、いろいろ出入りの商人さんもいれば、大工さんもいる。だけど、誰でもとにかく、純心に何かをしてくださる方だからという意味で、そういうことをかねがねおっしゃって、それはよく聞きました。

これは、うそか誠かわかりませんが、まことしやかにささやかれたことがありまして、本当かどうか分からないのですから、これはうわさ話と聞いていただきたいのですが、あるとき、泥棒が入ってきたのだそうです。なんかそういう人が入ってきたときにも、丁寧にお辞儀をするのよということで、みんなこうして歓迎の意味のお辞儀

をして、その泥棒が入ったとか、入らないとか。そういううわさ話が立つほど、とにかく純心の門を一步でも入る人は、純心のために何かをしてくださる方だから、丁寧にお辞儀をするのよとおっしゃっていたのを覚えています。人にお辞儀をするのに、それだけ意味づけをすることはあまりないと思うのです。だから、やはり随分、江角先生は、やはり人様にお辞儀をするということにこだわっていらしたんだと。

そして同時に、純心を訪ねる方、純心にご縁のある方を大切にしようということもあるのですが、国語の先生で、辞められて大阪に帰られた女性がいらっしゃいまして、あるとき、長崎を訪ねてくれました。まだ江角先生が文教町で、まだご病気になっていらっしゃらないころです。もちろん、校長先生は退いておられましたが、その先生が来られて、とても懐かしくお迎えになったのです。そして何時間か、何分間か、一緒にみんな話されて、帰られることになって、私も一緒におりましたので、その彼女と2人で純心を出ました。江角先生は玄関までお見送りになって、そしてもう、ここでいいですよと言うのに、江角先生はそのまま校門まで来られました。そして何遍も何遍も、あの先生のお辞儀はユニークなのです。手を前にして、ありがとう、ありがとうとお辞儀をして、元気でとか言って、お辞儀をして。

そして私たちが校門を出まして、左のほうに校庭の塀に沿って歩いていくと、ふつと振り返ったら、まだ江角先生、こうしていらっしゃるのです。まだいらっしゃるよと思って、少し急ごうと言って急いで行っても、あの校門から曲がり角までかなりあるんですよ。運動場の長さですから。100メートル走ができるぐらいのね。随分、長いのです。だからどんなに急いでも、やはり大変なのです。振り返っても、振り返っても、江角先生が立っていらした。ですから、姿が見えなくなるまで立って見送られる。本当に心を込めて人のことをお見送りするのだと。またいらしてくださいねって、ぱっと玄関を閉めるようなことはしちゃいけないということを、よくおっしゃっていましたが、そのときに江角先生の姿が印象的でした。

それで私たちは、本当は、長崎のことをご存じない方はわからないかもしれませんが、純心の校門を出てから、こう行きますよ、こう曲がっていくんですよ。それから、こうまっすぐ行って、こう電車のほうに行く道があるんですね。こう歩いて、私たちはまっすぐ行って、かなりまっすぐ歩いて行くつもりだったんです。ところが振り返っても、振り返っても、江角先生が、またこうして、こうしていらっしゃるものですから、用事もないのにここで曲がろうと言って、左のほうに曲がったのです、裏のほうに。曲がって、そのあとまたこう、江角先生がいらっしゃらなくなったころに出たのを覚えていて、それぐらい本当に徹底していた。

私は長崎におけるものだから笑いましたが、その大阪から来ている先生は、あんなお見送りを見たこと、私ないわとおっしゃっていました。本当はないと思います。玄関

先で見送るといのはあっても、ずっと100メートルも続くのを、こうして見送るといのはあまりない。大阪から来られて、今度は会えないかもしれない、いつ会えるかわからないという方だったのかもしれないけど、本当にやはり徹底しておられて、そういう行動は私たちの胸を打ちました。

また、本当に一人一人の人を大事にするというは、私が勤めだして間もないころでしたが、1人、卒業生が女優さんになったのです。浜元先生が担任だったと思う。女優さんになって、今、NHKで朝のテレビ小説が8時過ぎにありますね。あれのはしりだったところに、その人が出たのです。ご年配の方は覚えていらっしゃるでしょうが、男性の俳優で笠智衆さんというのがいたでしょう。あの人たちと一緒にやって出たのです。ですから大概の人が見たけれども、なんかの劇団に入って、とても重宝がられて売っていたのです。それが終わってそのあと、だんだんその子も、朝の連続テレビ小説が終わってからは私たちも関係なかったのですが、一度、森繁久弥劇団というのが長崎に来たときに、そのなかに亀井さんという卒業生が、なんかちよい役で出ているというのが入ったのです。卒業生からも電話があったんじゃないかと思います。本当にそれは昭和30年代か40年、とにかくもう随分、昔です。

その話を聞いて私たちは、ちょっと話題にはしましたが、それだけだったのです。江角先生は、夜だったか、昼だったか、忘れましたが、お一人で、公会堂まで彼女に会いに行かれたのです。今は、わりと修道院の先生方も皆さん、社会性を考えているなどところに行かれますよね。だけど、あのころ、先生がお一人で、公会堂の演劇をやっているところに行かれるなんていうことは、まずなかったと思うのですが、一人で亀井さんに会いに行かれて、そしてやはり亀井さんを励ましたといって、亀井さん、すごく喜んでおりました。だから本当に、ただ人を大切にするのよと言うのではなくて、一人一人のことを本当にとことん、尽くされる方だったと思います。

東京の八王子にあるお寺から、お寺の息子さんが、私と同年代ぐらいでしたが、純心に短い期間、勤められたことがあります。国漢の先生で、お寺の息子さんでしたが、非常に優秀な、有能な方でしたが、ご自分のお寺のこともあって、いろいろと内的な悩みもあったのか、時々、怒り狂ったりなんかして怖いこともあったのです。その先生が、純心でいろいろ怒り狂ったりして、江角先生にご迷惑をかけたりなんかしたのですが、私たちは尊敬していたのです。その先生が、2年たちまして、東京にお帰りになるときに、どういわけか、夜行列車で帰る。10時ぐらいの列車があったんですかね。私たちはもちろん、一般の職員はお見送りに行きました。夜の確か10時、最終でした。そうしたらなんと、江角先生がおいでになっていたのです。たった1人で。

私はよくわかりませんが、修道院の先生が夜の10時過ぎに一人で行動なさるといことは、あまりないと伺っていたので、真偽のほどはわからないのですが、そのとき

本当にびっくりしました。その先生は、非常にいい面と、怖い面と、両方持っていたのですが、とても能力のある方だったし、悩みもあったし、江角先生、やはりかわいがっていらしたのでしょうか。その方が、江角先生が亡くなったあとで純心に尋ねて来られました。そのときに、おっしゃいました。自分は、お寺の息子だったけれども、江角先生は、そんなことは全然、意識もしないで、私を非常に信頼して大事にしてくださったと、江角先生に感謝をされていたのです。その先生のお見送りに、11時近い夜行列車をたった一人でお見送りにみえたので、私は、よく修道院のことはわからないのですが、こういうこともなさるのかと思って、そのときやはり、この校長先生はすごいなと思った記憶があります。本当にまだ若いころでしたが。

ご自分に関わりのある方を、本当に大事に大事になされた方なのですが、私事で恐縮なのですが、私の父が、江角先生のご存命中に亡くなりました。父は亡くなる前に洗礼を受けておりましたので、教会でのお葬式もしたのですが、私の身内は、カトリックの者は誰もおりませんので、大変、純心の方々にお世話になったのです。本当にお世話になりました。安達先生も大変よくしてくださって、お世話になったのですが、そのとき、安達先生が帰られて、江角先生に会ったときに怒られたのだそうです。もっと何かしてあげなきゃだめじゃないのと。そして僕は叱られましたねと、翌日、またうちにみえたのです。何かすることありませんか、僕、江角先生に叱られましたって。うちは身内も少ないですし、もう何もありませんからと言ったら、いや、もう、江角会長にね、したらん、したらん、足りない、もっともってあげなきゃだめだって怒られたんだとおっしゃるのです。

それぐらい江角先生というのは、あれはコリント前書の書翰、慈悲に、ちょっと覚えていないのだけれども、書翰のなかに、愛というのはなんか、ただ舟に入れるんじゃないで、シスターの方々、ご存じかと。揺すって、揺り入れて、揺り入れて、入れるんだと。ただ始めにいっぱい入れたらそれで終わりだけど、揺すりますと、お米でもなんでも下に沈んで、まだ余地がありますね。それぐらい揺すり入れるものだと。愛というのはそういうものなのだというくだりが聖書のなかにあるのですね。それが江角先生、もう私、大好きなのよとおっしゃっていました。だから、もうこれでいいじゃなくて、これでもか、これでもか、これでもかって、そういうことを断片的におっしゃっているのを、ふっと思い出します。本当に人を大切にしてくださいる方でした。

そしてまた、私が忘れられないのは、思い出話に尽きて本当にお恥ずかしいのですが、江角先生は非常に耐える方だ、忍耐強い方だなど思いました。それは三ツ山での労作教育のときも、私がクラスの子どもを連れていくとき、もう江角先生はかなりご高齢になっていて、足なんかこんなふうには腫れて、ご病気になっていらっしゃる時もあったのです。そういうときでも、私たちが文教町の純心からバスに乗って途中ま

で行きまして、途中から歩いて三ツ山に登りますと、作業所に行きますと、もう作業所に作業の服装をして待っていらっしやるのです。私たちが行ったあとに江角先生が来られるというのが、立場からいったらそうですね。ご自分が待っていらっしやるわけです。

そして、よく来た、よく来た、よく来たとおっしゃる。それで時々、もんべみみたいなのはいていらっしやるんですけど、こう、たくり上げて、足がこんなに太いのです、腫れて。だから、やはり健康ではいらっしやらなかった。見ちゃ悪いと思って目をそらしたんですが、生徒よりも先に行って、本当に耳に覚えている。よく来た、よく来た、ほおら、よく来た、上等、上等と言って、そして作業を割り振りして待っているわけです。50人来るならこうと。それによってみんな作業をするのですが、本当に率先して。

労作教育でも、ご自分の方が本当にまさに、これはものすごい忍耐がいったらろうと思います。それから私は長崎の駅から諏訪神社のほうに行ったところに住んでおりました、電車通っていたのですが、7時ちょっと過ぎに電車に乗って学校に行くのですが、途中で駅を通るのです。そしてあるとき、駅のほうを見ましたら、駅のこっち側に、電車と駅のあいだにバスの停留所があるのです。そこにシスターが立っていらっしやるのです。よくよく見れば、江角先生だったのです。なんかサージの布でつくったようなバッグがありますでしょう、あれを持って、ああ、そういえば、あの先生、東京に行って、帰りにどこかに寄って帰ってこられると言っていらした、お留守だったなどと思って。その日の朝、夜行で帰ってこられたらしいのです。朝、私が学校に来るのが7時過ぎですが、そのときその汽車で降りて、そしてバス停でバスを待っていらっしやるのです。タクシーにお乗りにならないのです。こうして待っていらっしやっ

て。私は電車ですから、そのまま学校に行きまして、なんか用事があって学園長室の前を通ると、ちゃんと学園長室でお仕事をしていたらっしやるのです。だからバスに乗って帰ってきて、もうそのころ、かなりご高齢だったと思います。私が、なんか用事があって行って、先生、おつらくありませんか。今日、お帰りになったばかりで、きつくないですかと言ったら、平気よと言って、そのあとおっしゃったことが、周囲の方もお聞きになったことがあるかと思いますが、私はね、卵を生でツルッと飲むですって。それが、擬音が入ってるんですね。卵をね、ツルッと飲むのよ。そしたらね、元気が出るんだっておっしゃるのです。だから平気だとおっしゃるのです。生卵1個飲んだだけで、もうあのとき、60歳以上の年齢になっていらっしやる方が、夜行列車で帰ってきて、生卵1個飲んで元気が出るはずなんてないと思うんですけども、精神の問題でしょうね。なんかそれがおかしくて、卵をツルッと飲んだら治るとおっしゃっていましたが、本当に耐えて耐えて、よくお仕事をなさる方だなどと思っておりました。

純心ファミリーの会というのがありまして、それはお亡くなりになる年の7月12日、話がもう、江角先生の最期のところに飛ぶわけですが、江角先生は11月に亡くなられましたが、7月12日に純心ファミリーの会というのが開かれまして、大学、高校、中学校、幼稚園、すべての純心にいた方々と、その家族、奥さまから子どもさんから、全部を三ツ山に集めて、純心ファミリーの集いというのを7月12日にいたしました。しっかり覚えています、たくさんの方々が集まりました。

そしてそこで、江角先生はバレエがお好きだったのです。シスター、修道女の先生方のチームと、一般の先生方のチームに分けて、バレエをさせるのがお好きだったのです。そして修道女のチームが勝つのがお好きだったのです。そのときも三ツ山でそのバレエがありました。どっちが勝ったか覚えていませんが、江角先生がこうして見ていらしたのを覚えています。もちろん、そのとき、江角先生はもう、3、4カ月後には亡くられるわけですから、ご病気だったんですね。それが終わったあと間もなく、病床に伏されるわけですから、ご自分でも、もう不治の病だということがわかっているから、純心ファミリーの集いをなさって、純心に関わりのある人たちに感謝の言葉を述べたいというので、そういう会をなさったのです。そんな状態なのにバレエを、バレエはお好きだったのですが、座ってご覧になっているのです。こうやって拍手をしていらしたのを覚えています。

そして、もちろん、お昼には会食で、お食事も出たのですが、ご自分は、ほとんど召し上がれない状態で、私なんかそのとき江角先生を近くで拝見して、そのころこんな修道服で、なんか修道服のところで白い布が踊っているのです。踊るといふか、ぶかぶかなのです。顔が小さくなっているから、なんていうのかよくわかりませんが、それがぶかぶかな方はいらっしやいませんよね。ぶかぶかなのです。だから、ああ、やせていらっしやるんだなと思って、本当に私は見えて、なんか小鳥のような感じがしました。骨張った顔をしていらしたのです。それでも、にこにこして、本当に一人一人にお礼をおっしゃっていました。

知らない方の場合はそれほどでもないのですが、一番、感動したのは、私の知っている元純心の職員で、元純心の職員です、もう今は辞めているのですが。その方が、小学校と中学校ぐらいの子どもさんを連れてきているのです、江角先生のところへ。赤ちゃんが生まれたときも、江角先生のところに連れてきていたのでしょうか。だから、お別れにも連れてきていた。小学校と中学校ぐらいだった。江角先生のところに一人ずつ行って、お礼を言ったり、江角先生からお言葉をいただくという、江角先生にして思えば、きついことだったと思うんですね。行列していますから、みんな。そういうのがあって、私、その彼女のうしろに立っていたのです。そしたらその彼女が、その子どもを出して、息子たちですと言ったら、江角先生が、なんとか君と、なんと

か君とおっしゃった。名前をしっかりと覚えてらしたのですね。

私は、その方とそんなに親しくないから、いつ江角先生がこのおうちの坊ちゃんたちに会われたのかわかりません。ひょっとしたら、ほんの直前だったから、覚えていらしたのかもしれませんが、よくわかりませんが、それにしても、もう何百人という人が延々と、江角先生と最後のごあいさつみたいなつもりで来て、一人ずつ行って並んでいるのです。私も並んでいたのです。そこでなんとか君と、なんとか君って、名前を呼ばれて、その坊ちゃんたちは、とてもうれしかっただろうし、坊ちゃんたち以上に私は感銘を受けました。

自分の職場の人の子どもさんの名前を、江角先生は、いくら上長といっても、今その方は、純心の職員じゃないのです。純心を辞めて、別の職場に行っている。その方の坊ちゃんの名前をしっかりと覚えていて、名前と呼ばれるのはやはりすごいな、彼女はうれしかっただろうなと思って。私は自分に家族も、子どももないものですから、なにさと思ったのを覚えています。本当にどうして覚えていらっしゃるのか不思議なんです。それが、私たちが江角先生の公の立場としてお目にかかったのは最後でしたが、その会で集まっている大学、高校、中学、それから幼稚園の関係者全員を集めて、そしてお礼の言葉を述べられました。もうこれが最後と思っていらっしゃったから、7月12日でしたが、本当に力強いごあいさつでした。

そして職員を代表して、高等学校の、私たちの教頭の松崎という先生が、お礼の言葉を述べられました。松崎先生も、私はあっぱれだと思ったのは、ご病気をなさって、お元気になってくださいということは、一言もおっしゃらなかったのです。そういうことはもう、江角先生には通じないというのがわかっているから、もちろん、ご病気がどうこうということも触れませんが、普通だったら、病気でしばらく休むという方だったら、早く治されてとか、お大事にと言われるのですが、松崎教頭はそれを言わなかったのです。私もその先生とそんなに親しくもないし、どうということはないのですが、そのときだけは、ああ、彼は本当に率直なごあいさつをなさった。本当に心からお礼を、江角先生に対する感謝を述べておられましたが、本当にいいごあいさつで、いい純心ファミリーの、7月12日にしましたが、本当に江角先生の力強い感謝の言葉と終始にこやかな笑顔が印象的です。

いつ何が起こるかかわからないので、たぶん、フランススコ病院の秋月先生だったと思うのですが、ずっと付き添っていらしたのです。かなりの時間ですから、お昼ご飯もあって、バレーの試合とか、かなり長いでしょう。だから江角先生、やはり7月、いつモニターがおかしくなって倒れられるかわからないなど。秋月先生が来ていらしたのを覚えています。それが7月12日のことで、そしてそのあと、11月にお亡くなりになるのですが、大阪から来た同僚を送るのに、ずっと立っていらしたと申しあ

げました。その先生が、11月に、また大阪から江角先生のお見舞いにみえたのです。私と2人で見舞いに行きました。本当はもう、見舞いは疲れるから、そして一人を許すと切りがないから、お見舞いはもう、なるべく許してほしいと伺っていたのですが、さすがに大阪からお見舞いにみえているものですから、通ることになって、私がご一緒して入ったのです。そのときはもう本当に、なんていいですか、ご病人でした。11月だったと思いますから、本当に弱々しいご様子で、その先生が、いろいろな話をして帰るときに、先生、つらいときには、痛いときには、痛いっておっしゃいませよ。痛いって言ったら、一瞬でも、痛みが少し和らぐ気がするものですよと。その方も大学病院の医学部の教授のお嬢さんだったから、いろいろなことをよく知っていらっしやるのです。痛いときには痛い、苦しいときには苦しいと、おっしゃいませ。そして、いくらかでも、そのとき楽になられますよって、本当に心からおっしゃったのです。そしたら江角先生は、わかったわとおっしゃって、でもね、私ね、どうしても天国に行かなきゃならないからね、我慢するのよとおっしゃったのです。もう涙が出そうでしたが、おそらく、つらくていらしたのだらうなと思います。秋でしたから、それからそんなに長くなかったと思うのですが、それがとても印象的でした。本当に忍耐強い方だなと思いました。

私は、その忍耐ということについて、江角先生ご自身が、意志が強いし、これまでいろいろなご苦労を克服してこられたし、戦時中、純心が、非常に苦労があったときも耐えられたから、忍耐がおありなのは当たり前だと、やはり思っていたし、今も思っているのですが、1939年に第1回の卒業生、35人を送り出したのです。その卒業式の式辞というのを読ませていただきました。これは出版物になっていますから、皆さん、ご本で読まれると思います。純心のシスターが書いていらっしやる江角先生のご本にも出ています。私はそれを読みまして、とても感じるどころがあったのです。これは昭和14年、1939年のときの式辞、第1回の卒業生です。35名です。読ませていただきますと、ちょっと文語的な言葉なのですが、もうご存じの方がいらしたら、ごめんなさい。

「ここに本校、第1回卒業証書授与式を挙げるにあたり、多数来賓のご臨席をかたじけなく[忝う]したるは本校の最も光榮とするところにして特に卒業生の感激深きものあるを察し謹みて感謝の誠意を表しまつる。」そして、「卒業生諸子よ、」と呼びかけて、ちょっと省きますが、「諸子は歴史なき学校の生徒として幾度肩身の狭き思いをせられしぞ。されど諸子はよく耐え以て純心の基礎を確立せられたり」というところがあります。私はこの1行、2行を読んで、本当に江角先生は、おつらかったんだらうなと思いました。卒業していく子どもに対して、あなた方は、歴史のない学校の生徒として、何度、肩身の狭い思いをしたでしょう。でも、よくそれに耐えて、純心の

基礎をつくってくださいましたと、生徒に向かっておっしゃっているのです。

ということは、ご自分がどれだけなさっているか。ご自分が何もなさらないで、生徒にそういうことを言われるはずがありません。どれだけの侮辱と、軽んじる言葉と、侮りと、そういったものを、江角先生ご自身も受けられた。だからこそ生徒に向かって、幾たび、肩身の狭い思いをしたのかと。でも、よく耐えてくれたということ、生徒に向かっておっしゃるのだと思います。こんな卒業式の式辞を私は聞いたことがありません。生徒に向かって、あなた方はつらかったらう。ねえ、この純心に来たおかげで、肩身が狭かったらう。よく我慢してくださったという式辞を、私は本当に聞いたことがないのです。こういうことを言わざるを得なかった先生が、どんなにつらくていらしたのかというのを、お察しすることができます。

これは戦争が終わって、私は引き上げてまいりまして、そして先ほど、先生からのご紹介があったように、県立女子短期大学というところで1年間、助手をしまして、ご縁があって純心にまいりました。そのときにも、私は諏訪神社のそばに住んでいたので、ほとんど純心のことは存じませんでした。私の周りにいる人たちは、やはり、全然、悪意はないんだけど、行きなさんと言ったんですね、正直。有名でない、無名に等しい、昭和20年代ですからね。だから、あなた行きなさん。そのうちになんかお勤めがあるから行きなさんということを行いました。

それから、私がバイブルクラスで英語を勉強するために行っていたプロテスタントの教会が、やはり諏訪神社の付近にありまして、そこに行っていたのですが、その牧師さんがとてもいい方ですが、どこで私に純心からお話があったのが、わかったのかわかりませんが、早速その晩、うちに来られて、行くな、行くなと言ったのです。カトリックのところなんて行くものじゃないと言って、世にも不思議な、なんでプロテスタントの方が、いろいろところで対立はあっても、私が行くことに対してまで行くなと言うぐらい、積極的に嫌うのかと思ったのですが、そのぐらいやはり、純心という学校は、町中では、社会的な地盤というものを持っていなかったのです。ですから私も純心のことを存じませんでしたが、とにかく純心にご縁があって勤めるようになったわけです。

卒業式のときに江角先生がおっしゃった屈辱にも満ちた言葉ですね。こういうものから考えたら、このときのこれを耐えることを考えたら、江角先生の忍耐力というのは、あとの忍耐というのは、種類は違いますが、もう戦時中にすでに体験していらっしゃるのです。カトリックであるがために、非常にいろいろなことを言われたり、今ここにあるように、肩身の狭い思いをしたかと生徒に呼びかけるぐらいの肩身の狭い思いを、ご自分がなさってきたということ、やはりこれは戦後の貧しい時代よりも、むしろ戦時中のほうに多くの忍耐を江角先生は経験なさっているのではないかと思

ます。とにかく江角先生は忍耐の方でした。

最後になりますが、江角先生のままじめなことばかりでしたが、非常に面白いというか、おかしなところもいろいろ、私は拝見していきまして、そういうことも述べさせていただきたいと思います。本当に江角先生は頭のいい方でしたが、時々、理不尽な叱り方をなさるのです。私は理不尽な叱り方をされて、腹が立って、腹が立って、若かったものですから、純心から長崎駅を通過して、諏訪神社の家まで、もうぶんぶん怒って、歩いて帰ったことがあります。40分以上かかって歩く。早足で、もう本当に腹が立って、腹が立って、なんなんだと。それだけ怒ったのに理由を忘れているから、たいしたことはないんだと思います。とにかく理不尽に怒られることがあるのです。

例えば、ある進学クラスを持っていまして、そして純心短大、このときは短大でしたが、推薦とか試験があって、一緒に私たちも判定会に行くわけです。そうすると、私のクラスから行く人が少ないのです。そうすると、もうその場で本当にめちゃめちゃ怒られるんですね。山長さん、何してるの、あなた。なんかかかんとかって、怒られるんですよ。私は大学の進学クラスなのですね。純心に行くのは、それは行っていいのですが、純心に行くだけでは、決して長崎のなかで、純心の学生としては知的なあれが上からないから、やはり国立大学、長崎大学にやったり、あるいは他の福岡の大学にやったり、県内で言うなら県立短大であったり、とにかく純心以外のところに純心の生徒を入れなくちゃいけないから、あなた、このクラスで頑張ってください、私は4月に任命を受けたのです。

そうしたら、1年たって、純心短大に山長さんのクラスからは来ていないじゃないの。何してるのよと怒られるのです。しかも、いっぱいいらっしゃるのです、判定会だから。担任が6人ぐらいいらして、純心にゴッソリ30人ぐらい上げている先生は、上等、上等なんですね。私が、あなた何してるのよと怒られるのです。そこで私のクラスはなんて、しゃくし定規に言ったら、ますます怒られますから、もう黙っているしかないのです。もう会議が終わったら、悔しくて涙がぼろぼろ、ぼろぼろ出て、トイレに行って泣いても、もう治まらないで、駅まで歩いて帰ったこともあったのですが。とにかくもう、めちゃくちゃおっしゃるのですが、そのときはやはり、すごくわかっているの、すぐ気が付かれるのです。本当に翌日、たいした用もないのに校長室からお呼びだと言うから行くと、なんか用事もないんだけど、用をさせるのです。そして私をお認めになるのです。私は、ああ、昨日、私が理不尽に叱られたから、これは私をなだめていらっしゃるんだなって、もう、ありあり、見え見えなんですけども、あの賢い先生が、そういうことをなさるといのが、今考えても、そのとき考えても、本当におかしくて、やはりこの方、頭がいいけれども、憎めない方だと思えました。放っておけないんですね。昨日も、あの人はあんなに怒ったけれども、ま

あ、いいや。放っておけないから、なんか訳のわからない用事をつくって呼んで、とにかく私を景気づけようとなさるといふ気持ちだけはわかる。そのような、でもなんか、理不尽な叱責などの処置というのが見え見えだけれども、とにかく面白い方だなと思っていました。

本当におかしなこと、やはりくだらないことなのですが、修学旅行に行くときに、お見送りに必ず来てくださるのです。私も行きます。修学列車というのがあって、修学旅行の生徒が乗っていくわけです。そうしたら運転手さんのところに行って、よろしくお願いします。純心の、うちの生徒がおりますからとおっしゃるのです。そこまではわかるのです。そしてそのあと、あなたね、気を付けてね、ゆっくり走ってくださいね。ゆっくり走ってと。国鉄、JRの運転手さんに、機関車のところまで行って、ゆっくり行ってくださいね、大事な生徒さんですからねとおっしゃるのです。運転手さんも、修道女の方がおっしゃるので、にこにこ笑って、はははとおっしゃっているけれども、私は横にいておかしいのです。本当に大まじめでおっしゃるのです。それぐらい、本当に生徒のことを思っていたらっしゃいましたね。

江角先生が時々、はがきをくださったことがあります。まだ私が勤めだして間もないころです。なんか、お手紙を出しますと、必ずはがきをくださるのです。まだ50歳になって間もないころですが、必ず最後にご自分のことをババよりって書いてあるのです。私はそのとき、私がまだ20歳代ですから、ババよりと書かれていても、ぼおっと見ていたのですが、今考えると、私が20歳代で純心に勤めだしたころは、江角先生は50歳になったぐらいなのです。今どき50歳の人が、ババと言うのでしょうか。おそらく言いません。江角先生が、ババと言うと、なんか納得するものがあつたんですけども、あの先生は、そのころから自分のことをババって、やはり認めてたのか。随分、老生した方だったなと感じます。

いろいろ、とりとめのないことばかりお話をして申し訳ないのですが、江角先生の人間らしいことというのは、もうたくさんありまして、私が勤めだしたころ、私に結婚を紹介するとお勧めになったのです。信じられませんでしょう、シスターがです。

まだ女性の教員が私だけのときでしたか、県とか市から、お客さんが来ると、用もないのに私をお呼びになるのです。行きますと、その方に、この人は独身ですから、いい人があつたら紹介してくださいねって、校長先生がおっしゃるのです。信じられませんでしょう。私はそのとき、まだ22、23歳ですから、そんな、いえいえとか言う、あら、山長さん、そういうときには、よろしく願いいたしますって言うものなのよっておっしゃるんですね。よろしく願いいたしますと言うものなのだというのを、どこで江角先生は仕入れていらしたのかわかりませんが、そういうことが3回ぐらいありました。だから本当になんていうのか、それをまじめにおっしゃっているのか、私を本

当に結婚させたかったのか、そこら辺は江角先生とかでも、わかりにくい方ですが、なんかもう本当におかしなことがありました。

もう時間ですね、すみません。お正月に和服を着て、お年始に行きますと、江角先生、非常に喜ばれるのです。私は和服なんてあまり似合わないのですが、正月ぐらい、着物を母に着せてもらって、もう一人、同僚の体育の先生と2人で、正月の2日に文教町に行って、江角先生におめでとうございますと言いますと、もう、あっち向け、こっち向けと言われて、あら、上等よ、あなた上等よ、きれいよって、2人をものすごくほめてくださって。そのころ、松下先生が校長だったのですが、松下さんと呼んで電話でおっしゃって、松下先生が来られる。ミネさん、ミネさん、ほら、2人、着物で来ていらっしゃるわよ。ほら、見なさい、見なさいと、ミネ先生に見せて。

それで、ミネさん、ミネさん、あなたは飲みたいんでしょうと言って、この人、お酒が好きだと、ビールがお好きなんですね。ご存じだった。だけど飲めないから、あなた方が来ているから、いいあんばい、いいあんばいと、よくおっしゃっていました。どこかに電話をして、ビールを持ってきなさいと、コップに、そして、もちろん、私なんて飲みませんでしたが、ミネ先生に、ほら、飲みなさい、ほら、飲みなさいって、ミネ先生に飲ませる。飲ませていらっしゃる。私はなんか、修道院のなかって、こういうふうにして飲ませるんだって、不思議な気がしましたが、悪い気はしなかったですね。非常にミネ先生もうれしそうに飲んでいらっしゃるのです。あの温厚な、厳しいミネ先生がビールを飲んでいらっしゃるのを見て、なんか不思議なものを見たと思いましたが、とにかく江角先生というのは、見かけではわからない、いろいろな面を持っていらっしゃる方だというのは、ずっと晩年になって、私も年を重ねて思うようになりました。初めは怖い先生、尊敬する先生、亡くなったら、非常に面白い先生であったなというのをつくづく思います。

最後になりましたが、江角先生との出会いについて触れておきたいと思います。私は、先ほどご紹介もあったように、県立短大の助手をしておりましたが、ちょっと事件みたいなものがありまして、4月の5日か6日、もう新学期が始まってから、急にトラブルが起きました。私が謝ればよかったのですが、悪いと思わないのですね、若いものだから。謝りませんと言ったら、結局、謝らないのなら、辞めなきゃならなくなって、そのときの教務課長かなんかが、じゃあ、辞めてもらえますかと言うから、売り言葉に買い言葉で、辞めますと言って辞めて、4月の6日かなんかだったのです。ちょうど鳴滝の丘に桜が舞っていました。そこを私の主任の教員と2人で、これから先、どうするかと言うから、どうにかりますと言って、若いですからね、22、23歳でしたから、こう下りてきたところに、世にも不思議な格好をした女性がいて、その方が江角先生だったのです。その方と、その私の主任教員の先生が偶然にもお友達

だったのです。2人で、ああらって、お話をされて、その方が、先生、先生、もう英語の先生は残っていませんよねとおっしゃったのです、江角先生が。急にね、一人の人が、英語の先生がプロテスタントの方で、それでもいいと思ったんだけど、中学の授業に行つてプロテスタントの布教をなさるのだそうです。それは困ると。プロテスタントでも構わないけれども、なんかプロテスタントの教えを、中学生だから、すぐ家に帰つて報告する。親から苦情が来て、結局、辞めてもらわざるを得なくなったから、急に人がいるんだけど、4月の6日か7日でしたから、もういませんよねと、その江角先生が、お友達だという方に信じられないような言葉でおっしゃっているのです。そしたらその方は、よければここにいますよと。

私は学校の先生なんて、先生なんかって変ですが、若いときは先生になりたくなかったのです。なる気はなかったのですが、世にも不思議な服装の方がいらして、なんかかんかおっしゃつて、その方が、ここにいますよ、この人、できると思いますよと言つたら、江角先生、私の名前も、何も聞かない。ああら、あなた、上等、上等、上等よつて、私のここを、こうたたかれて、上等よ、上等よつて。私、人間に上等よつて、生まれて初めて。でも、びっくりして、何がなんだかわからないんだけど、そこでその2人のあいだでなんかかんか言い交わして、私は、じゃあ、行つてみるかということになって、翌々日に、今も、当時、家野町と言つていましたが、そこまで、諏訪神社の家から初めて足を運んだのが、純心学園でした。それがご縁でしたから、あの桜の木の下での江角先生との出会いがなかったら、おそらく、純心というところからご縁があるそうですよと言われても、行つたかどうか、それはわからないのです。世にも不思議な、江角先生との出会いですね。しかもそのとき、絵になるような桜が散つて、小さい江角先生の顔だけ見えて、あとはなんにも見えないし、なんかもう世にも不思議な語らいがとても印象的で、足を踏み込んだのが純心でございました。ですから、私は江角先生にスカウトされたんだと自負しております。有り難いことだと思つております。

本当に長い時間、至らないところばかりで申し訳ありませんでした。年寄りのおしゃべりみたいなものになつて恥ずかしいのですが、これで終わらせていただきます。本当にご清聴ありがとうございました。懐かしゅうございました。

【司会】山長先生、本当にありがとうございました。まだ若干、予定時間より早い感じですが、本当に皆さんも楽しく、そして印象深く、聞かせていただいたと思います。私どもも、たぶんセンターの一同も、山長先生にお願いしてよかったと心から思つております。今から10分間ほど休憩をさせていただきます、先生もちょっと息をお入れにならないと大変だと思いますので、40分ぐらいから、今度は今の先生のお話を伺

て、いろいろなことを思い出した方もありましょうし、この先生だったら話しやすいなどという印象を受けられていると思いますので、たぶんフロアから、たくさんいろいろなコメントとか、ご質問が出ることで期待しております。先生、またお忙しいことで申し訳ございませんが、今度は皆さんの発言に応じてお話させていただきますようお願いいたします。

【山長】超過しちゃいましたか。

【司会】いえ、違います、先生。40分まで時間はあったのですが。

【山長】話は1時間の予定だった。

【司会】いや、それは先生、大丈夫です。みんなまだ、聞き足りないぐらいだと思いますので、また今度は、必ずしも江角先生だけに限らなくても結構です。山長先生もいろいろなご経験がおありになると、ご紹介でみんなわかりましたので、そんなことにも関連して、先生のほうからも、それから皆さんのほうからも、もしかして、この先生のお話を伺って江角先生のこんなことを思い出したということがありましたら、みんなでそういうことも分かち合いたいと思いますので、楽しい座談会、ちょっと大がかりな座談会と思って、お集まりいただければ有り難いと思います。では、よろしくをお願いいたします。本当にありがとうございました。

「江角ヤス先生」第二部

【司会】時間が4時半ぐらいまではございますので、皆さん、ぜひ、こういう先生ですから、いろいろなことをお話していただけたら有り難いと思います。手を挙げていただいて、簡単に結構です。山長先生への自己紹介も兼ねて所属とお名前だけを言っていて、ご質問なり、コメントなり、してくださいませ。どなたでも結構です。手を挙げるなり、合図なりをしてくださいませ。よろしくをお願いいたします。

【山本】事務局の山本と申します。今日は本当にありがとうございました。私は学園に入って、まだ1年と短いのですが、とても印象深かったのは、「マリアさま、いやなことは私がよこんで」と、その標語に込められた先生の、本当に人様を大切に思われるその心と、いろいろなことに耐えてこられた強い心が、この標語のうしろにあるんだなというのが、先生のお話を通じて、今日は、わかりました。一つ、お聞きしたいのは、そんな強い心を持っておられた先生が、花をととても愛しておられるというもお聞きしましたが、先生は何か趣味を持っておられたのかなど。先生の好きなことはなんだったんだろうなど、先生の優しい、たぶん心を表すような何かがあったんじゃないかなどというのが気になりましたので、もし、そういうのにお気づきになったら、教えていただきたいと思います。

【山長】ははっきりわからないのですが、安達先生という江角先生のご縁戚の方がいらっ

しゃいまして、その方とご一緒に、江角先生がお亡くなりになって1年目ぐらいに『追慕の記』、江角先生を思い出す本をつくるという、私はその委員になってしまして、安達先生が、簸川郡の斐川町ですか。江角先生のご実家、出雲ですか。あの辺にお連れくださいました、お墓とか。そのときに、出雲という街、出雲市ですか、そこに、出雲高校というのがあって、そこに安達先生はお連れくださったのです。どうしてお連れくださったのかわからないのですが、そこはすごいきちんとした植物園があるのです。区切りをきちんとして、小さな植物があると、そこに必ず、きちんと説明書きが付いているのです。一本一本、どんなものにも、きちんとしているのです。

出雲高校だったと思います。安達先生がおっしゃるには、江角先生はそれを見ていらしたと。確か、出雲のほうの学院、師範に行っていたんじゃないですか。そのときにそれを見ていらして、植物というのは、こんなふうにしてきちんと植えて、名前を付けて、きちんとわかるようにするんだというように思われたのではないかしら。これは安達先生がおっしゃったのです。江角先生のお庭に植えている木の植え方というのは、ここにあるですよとおっしゃって、その出雲高校の植物をずっと見せていただいたことがあります。江角先生がお亡くなりになってから2年ぐらいのこと、それは間違いありません。ただ、本当に江角先生がそうだったのかというのはわかりませんが、安達先生がそのようにおっしゃっています。よろしいですか、それ以上はわかりません。

【司会】ありがとうございました。風の便りで伺ったところでは、先生が今おっしゃったのは本当に正しいことで、その植物園をつくられたのは平田駒太郎先生とおっしゃる方で、今でもその植物園は平田植物園と呼ばれています。その先生の直接の教えを江角先生は受けられているので、一緒にお花を植えられたのではないかと思います。その辺ちょっとご参考までに。

【山長】伺ったところ、江角先生のご郷里を訪れられた、こちらの先生方。

【司会】そうですね。ただ、今ここにいらっしゃる方は少ないですけども。

【山長】私はそのときに、安達先生と、それからもう一人の職員と、やはり編集委員みたいなのをやっている、私と3人か4人ぐらいいたのです。江角先生のお墓に伺ったのです。そうしたら、お墓がとてもつつましいお墓で、安達先生が、こんなんで、もっともっと立派な墓をつくってあげることができたんだろうなとおっしゃったのです。それは江角先生ほどのお勉強をなさって、そして修道生活をなさらなければ、もちろん、それぐらいのこと、故郷に錦を飾って、あの当時、東北大学を女性が出ていたら、本当に故郷に錦を飾るどころじゃないですよ。だからお墓はもちろん、立派なものもできたかもしれない。お墓もね、立派なものもできたかもしれないんですが、おっしゃったのが印象的だったのです。

江角先生が、お父さまがとてもお酒が好きだったとおっしゃっていました。それで私も父が酒が好きで、私は、酒飲みは嫌だと思っていたのですが、なんかそんな話をしたのかしなかったのかわかりませんが、江角先生は、あら、私の父もお酒が好きで、そして、あの先生はお優しいのですね。自分でちゃんと収入を得られるようになったら、お酒をたくさん買って、お父さんに飲ませたいと思っていたって。そうしたら、お父さんが亡くなってしまったそうですね、わりと早くに。亡くなってしまわれてねって。私が飲ませてあげたかったのよとおっしゃったときに、私はなんか江角先生の、全然それまでのお姿と違った面を見て。

私は酒を男の人が飲むなんていうのはあまり、父親が酒を飲みますと、酒飲みがいっぱい集まってくるんですね。そして本当にもう、父だけが飲むんじゃない、いっぱい集まってきて、もう本当に母が苦勞をしているのを見ているから、もう酒飲みが大嫌いだったのです。そのときに江角先生がそんなにおっしゃったのを見て、父にお酒を飲ませてあげたかったっておっしゃったのを聞いて、世にも不思議なお話のような感じで伺ったのですが、そういう普通の父親と娘さんという、お優しい関係も、やはり当然のことながら持っていたのだなど、そのときに実感いたしました。

【司会】ありがとうございます。他にたくさんあるだろうと思いますので、どうぞ時間のあるうちに伺ってくださいませ。鹿児島あたりで、江角先生から直接の薫陶を受けられた語り手の方を見つけることはなかなか難しいので、今日はとてもいい機会ですから、なんなりと聞いてください。山長先生ご自身のご経験に関わることでよろしいかと思います。順不同で結構です。はい、どうぞ。

【広瀬】国際人間学部のこども学科の広瀬と申します。本日は大変興味深いお話、どうもありがとうございました。私は勤めて今4年目です。もうすぐ丸々4年になるのですが、私もちょっと授業のなかで畑をやってみたりして、江角先生の労作教育には全然及ばない、そんなことも全然、考えていなくて、一つは、授業のなかで畑づくりを通した自然体験活動というのがとても大事だと思うので取り組んでいるのですが、その江角先生の労作教育にかける思いはどんなものだったのかなど。労作教育に携わるエピソード、あるいは労作教育を通して子どもたちが学ぶこと、もちろん、本にもいろいろ書かれてあるのですが、先生の見聞きされたところから、労作教育に関わるエピソードをよろしければお話いただければと思います。お願いします。

【山長】私も労作教育のことに關しては、あまりよく存じませんが、お始めになったころというのは、今のようなセミナーハウスとかがある時代ではなくて、純心のほう、三ツ山に上がっていきますと、一番てっぺんのところは、左側に行くとき純心大学、右のほうに行くとき原爆ホームとかに分かれるところがあります。そのちょっと下のところの右側に、なんか大きな家がありまして、空き家みたいなのがありまして、そのお

うちがなんだったのかよくわからないのですが、バス通りの、純心の恵みの丘に上がって行って、頂上のちょっと下のところの右側です。今はもうありませんが、そこで作業をして宿泊をして、そして座談会みたいなものをして、そのまま翌日、また少し働いて帰るというのが、労作教育の2段階目だったような気がします。

最初は、ただ三ツ山に行って植林をしたり、そういうことでしたが、そのうちに小さなおうちに1クラスずつ行って、江角先生も一緒に、すき焼きを囲んで、すき焼きといっても豚肉のすき焼きなのですが、おいしいわね、おいしいわねと言って、食べていらっしやっただ江角先生の姿が目には浮かびますが、ご一緒に召し上がって、そして翌日、また午前中は働いて帰って、やはり江角先生は、とにかく勉強というのを本当に第一に学校でも置いていましたが、やはりよくお祈りをして、よく勉強をして、よく働くということも、非常に重要な教育目標にしておられたような気がいたします。ですから、長崎純心では当然のことですが、東京に友達がおりまして、その人は子どもさんをカトリックの学校に通わせているそうですが、私が純心に勤めていると聞いたなら、いろいろなことを話して、私になんかの話で、あら、あなたの学校では生徒さんが掃除をするのと言うのです。生徒が掃除をしなくて誰がするのと言ったら、その学校は東京ですが、ちゃんと業者が入ってお掃除をするから、生徒は掃除をしないと。そういう学校があるらしいですね。うそか本当かわかりませんが。

びっくりいたしました。純心はやはり、江角先生が、働くというか、奉仕するというか、そういうことに非常に重点を置いておられました。それを勧めになるだけではなくて、本当に江角先生はご自分で学校のトイレのお掃除をしていらっしやいました。これは私、何遍も見ましたので覚えています。今はマリア館という校舎でしたか、そここのところのトイレが汚いと言うのです。先生は時々、回っていらっしやるわけです。汚いと言われるのです。すうっと拭いているのですが、江角先生から見たら汚いのでしょうか。汚いと言って、汚いですませないで、ご自分で雑巾、バケツを持ってきて、そのころでも生徒は手袋を使って掃除をしていましたが、まあ、非衛生的と言われればそれまでですが、江角先生は手袋なんかはめないで、じかに雑巾やら、紙やらを使って。そのころは水洗ではありませんでしたから、普通の、昔のお手洗い。その陶器のところを、色の付いているところを、こうして磨かれるのです。

私はそれを目の前で本当に見たのです。見えていますから、私のクラスの掃除区域じゃないんですよ。ですが私、黙っておられなくなって、江角先生が、そのとき校長先生じゃなかったんだけど、ご引退なさっていましたが、元校長先生が、もうご高齢なのに、お手洗いの掃除をしていらっしやるのを見たら、しないわけにいかないから、私も一緒にしたら、あなた、ここはこうするのよ、こうするのよって、それはお詳しいのです。詳しいというか、要領を得ていらして、私なんか目ではないのです。そう

いうことをした経験が一遍だけありますが、ご自分で働くということをととても意味あるものと思っていらしたから、ご自分でも掃除をなさっていた。

それと労作教育が結びつくというわけではないのですが、たまたま三ツ山にあのような大きな山があって、仕事はいっぱいあるわけですし、老人ホームもあるわけですし、老人ホームに行ってお老人のお世話をするという労作の時期もあったのです。半日はそこに行って、昼からはまた違うところに行くとか。とにかくやはり心を大事にしなければいけないけれども、同時に頭と心と、それから実際に手足を使って働くという、修道会によっては祈ってそして働くということを非常に重要視している修道会もありますが、純心も決して頭でっかちにならないように、本当によく働く。

そしてあの先生は、先ほども申しましたように人様という言葉をよくお使いになりましたが、人様に奉仕するというのを、よくおっしゃっていました。人様なんていうのは、非常に不思議な言葉ですが、江角先生がおっしゃると、人様というのがごく自然なのです。人様に奉仕するとか、人様に仕えるとか、人の一番嫌がることをしてあげるというのが、私たちにとっては非常に非日常的で、ときには偽善的に見えることもあるのですが、江角先生にとっては、それが自然じゃなかったんですね。

私は黙って江角先生がお手洗いの掃除をしていらっしゃるところを、少なくとも2、3回は見ています。どこかで見回りをしていまして汚かったら、もう人に言うより、ご自分がなさるんですね、そこら辺の掃除のバケツに水をくんできて。そういうのに出くわして手伝ったこともあるし、恥ずかしくて声もかけないで逃げて帰ったこともあるし、いろいろでしたが、少なくとも2回か3回はありましたから、本当に身をもって、やはりそれをやっていたらっしゃいました。だから本当に正直言って、私たちのようないかげんな人間から言うと、そういうときにはとても煙たいですね。あまり上の方が動いたら煙たいじゃありませんか。だからもう、身の置きどころがないような思いをしたことも何回かあります。これぐらいです。

【広瀬】どうもありがとうございました。

【司会】ありがとうございました。他にはございませんでしょうか。はい、どうぞ。

【八島】本日はありがとうございました。中学高校の教頭をしております、八島でございます。先生のことは、シスター前川、前川満記子先生のほうから、もう随分前から、伝説の先生としてお聞きしておりまして、ぜひ、お会いしたいと思いつつも、もう十何年前から、お話だけは伺っていたのですが、やっと今日お会いできることになりました。

【山長】それは恐縮です。シスター前川とは、もうシスターではないみたいにかかをしたりするのです。今でもよくお会いしていますし、なんか今回のことも、シスター前川も、この講演にひと役買っていると聞いて。

【司会】そうですね。

【山長】もう、そしたら、電話の向こうでケラケラ笑っていらしたのです。ああ、そうですか。

【八島】ぜひ先生にお聞きしたいなということがありまして、それは、こういったなかなか難しい、さまざまな意味で、純心教育をどう生かしていこうかという時代の、私たち純心に勤める者でございますが、もし、今、江角先生が生きていらっしゃったら、私たち純心に勤める者に対してどういう言葉をおかけになるのかなということ、山長先生の見た感じで結構でございますので、どんなお言葉、どういうかたちで純心教育を理解してほしいと、江角先生はおっしゃりたいのかなということ、ぜひ、お聞きしたいなと思ひまして、質問をいたしました。以上です。

【山長】難しいですね、わかりませんね。わかりませんが、やはり耳元で聞こえてくるのは、勉強しなさいという言葉と、もう一つは、生徒を大事にしなさいという言葉が聞こえてくるような気がしますね。あとはわかりません。とにかくやはり生徒を大事にしなさいということは、それは間髪を入れずでした。何か問題があって電話をかけたりなんかしようとしていると、江角先生はどこで聞きつけたのか、すぐにやってこられて、私より先に出てこられる。それはいろいろ、あとから考えたら問題もありまして、やはり早く手を打っておかないと、社会問題になる恐れのあるようなことも、なきにしもあらずだったのです。そういうところがものすごく江角先生は、目が光るというのか、私なんかはもう、ぼおっとしていますから、気が付かないのですが、これは早く処置しておかないと大問題になるなんて思うことも、非常に、本当にやはり頭のいい方で、そして修道院のなかにもっていらっしゃるのに、どうしてこんなに世の中のことがおわかりになるのかというぐらいでした。

ですから、これは早く保護者になんとかしておかないと、今の言葉で言うと、やばいと言いますか、大変なことになるとということには、なんにも詳しいことを言わないのに、山長さん、来なさいと言って、どういうわけか、それがよく私のクラスで、他の方はそんなに江角先生が手を引っ張られて行っていらっしゃるのを見たことがないのですが、私は何回か行きました。それは毎日新聞の長崎支局長のお嬢さんが、本当にいい子だったのですが、先ほども江角先生が駅で夜遅いのお見送りに行ったと言いました、この先生に非常に愛されてというか、一目置かれていた生徒だったのですが、なんか非常にエキセントリックな顔をしていて、非常にユニークな顔をしている。

あるとき、その男の先生が、非常に誤解だったのですが、職員と生徒の両方から侮辱されたという誤解を持って、もうカンカンに怒られたのです。そしてそれに私のクラスの子どもも関係して、ぬれぎぬなのですが、私もハラハラして、八田先生などは、初めて見ましたけれども、廊下にひざまずいて、手を廊下について。八田

先生は、べつに私のクラスと関係ないんだけど、やはり純心の職員であるという立場から、八田先生のあんな姿を初めて見て二度と見たことはありませんが、廊下にひれ伏してと言うのですか、こうして、ひざまずいて、お許してください、先生、わかってください、堪忍してくださいとおっしゃって、私、覚えています。わあ、と思ったけど、私はそういう格好をようしませんでしたが、八田先生は私より年上でいらっしやるのに、お偉い方の皆さんが出て、それでもその先生はお聞きにならなくてごたごたしたのですが。

そういうとき、やはり江角先生は判断力がすごいですね。私なんてそんなになっても、どうしようかなと、まだ23、24歳でしたから、思っているのですが、江角先生は、とにかく要点だけ、ばばぱっと、すぐに行動に出て、なんかそういう問題があったら、来なさいとおっしゃって連れていかれたことが何回かあります。一度などは、長崎の繁華街の思案橋というところがありますが、昔は飲み屋さんがいっぱいあって、今も繁華街、飲食店街ですが、昔はもっと、あまり近寄れないような感じのするところで、そこのお嬢さんが純心に来ていたのです。

それでトラブルを起こして、私も困ったなと思ったら、たぶん江角先生がどこからか聞いて、山長さん、怖くて行けないでしょうと。来なさいと言って、朝でした。その生徒も学校を2、3日、休んでいたんだけど、来なさいと言って、そして思案橋、長崎に緑のある方はご存じの、思案橋の飲食店街がありますよね。電車で行ったら右側、今でこそきちんとなっていますが、昭和30年、40年代というと、バラックみたいな飲み屋さんがずらっと並んでいたのですが、そここのところに江角先生、ツカツカ、ツカツカ、私の手を引っ張って行って、その人のおうちに行かれたのです。行っても、朝でしたので、ああいう飲み屋さんに入っても、朝はなんか、なかなか会えなくて、そのときは無駄足になりましたが、私は、この先生すごいなと思いました。今はきちんとなった飲食店街ですが、怪しげなお店も、そのころはあったのです、昭和30年代。そういうところに修道服を着て、よくこの先生、行かれるなと思いましたが、そういうところは、まったくなんか動じない方でした。そういうことを、あとで純心の学校の補導をしている私よりちょっと若い男の先生に言ったら、信じられない、うそだろうと言われたのですが、その方は、お酒をよく召し上がる方で、生徒指導をやっていたけれども、そこら辺はよく行かれるのですが、その方が、まさか修道女の先生が、そんなところに行くはずがない。うそだろうって、信じなかったのです。でも、うそじゃありません。私も一緒に行きましたし、そういうことを本当に、これは今行かないと、この生徒はおかしくなると思うときには、本当に勇気のある方でした。すごいなと思います、今でも。

【司会】勉強をすること、生徒を大切にすること。なかなか幅の広い、奥の深いお話だ

と思います。他にご質問はございませんでしょうか。

【山長】その代わり、やはり厳しいところもおありの先生で、例えば生徒が病気で3日ぐらい休んでいて、そういうこともなんか、どこかからの報告でご存じになっていたのでしょうか。そこは、はっきりしないのですが、お見舞いに行っていなかったのです、私。まあ、言い訳がましいけれど、そのときも、明日、行こうと思っていますと、つい言ってしまったのです。そうしたらもう、本当に職員室、修道女の先生でそのときいらした方もおられると恥ずかしいのですが、職員朝礼かなんかでしたから、職員朝礼というのは職員室でやっていた時期がありまして、なんか3日以上たって見舞いに行っていない人がいるかいけないか、本当にそんなことまで調べられるのです。職員としては嫌ですよ、そんなの。

それで私が行っていないとわかったら、我慢ならなくて、本当にもう、ののしるように叱っていました。明日行こうと思っていますとか、今日行こうと思っていますとか言ったら、言い訳を言わないと言って、私が逃げ口上で言い訳を言っていると思われて、本当にそういうこともないわけではなかったのも何も言えなかったのですが、何も全職員のいる朝礼で、そんなふうのののしらなくてもいいんじゃないかと思って、本当にそういうときに江角先生はきつかったですね。それは確かにありました。だけど、許せなかったのでしょうか。3日も4日も学校を休んでいるのに、担任が見舞いにも行かない。やはり許せなかったのだらうと思って、それはもう、私からは文句の言いようがないのですが、ただもう、やはり20歳代か30歳代でしたから、みんなの前で怒られたというのは、本当に嫌だと思いました。

【司会】ありがとうございます。人間的な面があって、本当に身近に感じられるのではないかと思います。他のご質問はどうでしょうか。もう少しお時間がありますので、そのあいだに。

【山長】ただね、とても江角先生は率直で正直で、かわいらしいなと思うことがありまして、ここにいらっしゃるシスターで、ご存じの方がいる先生なのですが、ある先生が、純心でとても力のある方だったのですが、能力もあるけれども、言いたいこともずばずば言う。だからその言いたいほうだいの先生の側に付いているほうから見れば、気分がいいのですが、言われているほうから見れば、たまらないのです。純心のことも、カトリックの信者の方でしたので、女性ですが、ずばずば言う。もう本当に江角先生は、へきえきしていらしたのです。本当のことも入っているから、余計にやはり。本当のことを言われても、それは経営者として、校長として、どうにもできないことがあるじゃないですか。その方が、とにかく頭のいい方だから、ずばずば言うから、とにかくおつらかったのだと思うのです。

その方が、半年ぐらいで学校をお辞めになりました。そして辞表を出してきて、私

のところにその方がやってきて、山長さん、辞表を出してきたよと言って、私も、ええ、江角先生、なんておっしゃったと言ったら、あら、そうとおっしゃったって。その方が、あんた言いようがあるじゃないかと。せめてお世辞でも、どうして辞めるの、もう少しいてくださいって、言いようがあるのに、待ってましたとばかりに、あらそうって受け取ったと言って。その方は、やはりもう自分が嫌われていることがわかっているから、だけど、それを笑い話みたいにして、そして自分のところに帰られたのです。

そしたら、そのあとに来られた方と比べて、そのあとに来られた方もいい方なんだけれども、やはりいるときは目障りで、ずけずけ言うから嫌でというのがあったけれども、去られてみると、逆に人間って、いいところが目立つじゃないですか。その方のいいところが浮かぶわけです。そうすると、あとから来た人が気の毒ですよ、逆に。普通の人であっても、人間、失ったものはよく見えますから。そしてなんか、お手紙もいっぱい出されたらしくて、その方が、長崎の方ではないのですが、秋ぐらいに来たか、春先でしたか、夏休み前ごろに長崎に来て、私のところに泊まられていったのです。自分は戻る気はないけれども、いやしくも修道会の会長さんが、何遍もお手紙で自分が悪かったと。自分が、心が狭かったと。だから戻ってくださいと。そこまで言われたら、手紙とか電話で、いえ、もう帰りませんとは言われないと。やはり私は、わざわざ遠いところなのですが、来て、そして江角先生に、本当に申し訳ないけれども、戻れませんということをちゃんとごあいさつしないと、手紙ではできないと。その方もちゃんとわかっていらっしゃるのです。修道会の会長さんの方が、言葉を丁寧に、自分が至らなかつたから戻ってくれなんていうことを言わせてしまったと言って、そして、それでも来られませんが、おわびに来られて。

よほどその方に江角先生は戻ってほしかったとみえて、私の狭い下宿に泊まっていたのです、その方。江角先生に会って、2、3日おられました。そしたら、私のところに安達先生が、教頭先生でしたが、来られました。その辞めていった先生は、女のくせにお酒が大好きだったのです。安達先生が一升瓶を下げて、うちに来られて、彼女に飲ませて、江角先生のお遣いなのです。戻ってください、戻ってください。だからよほど江角先生は後悔なさって、そういうときの後悔は、後悔してもやはりプライドがあったら、多少、こうするけど、もうあの手、この手で、辞を低くして、その方に悪かったから戻ってくださいとおっしゃるのです。本当にそれは私もお気の毒でしたが、校長先生なのにここまでするかと思いました。

結局、その方は戻ってこられないで、その話はだめだったのですが、そういうときの江角先生の、自分は校長であるとか、そういうプライドを捨てて、もう本当に、言葉は悪いですが、なりふり構わないで、戻ってきてください、戻ってきてくださいって、おわびをなさる姿というのは、やはり私、ある意味、心打たれました。ただ、私もそ

の先生が辞めるに至ったいきさつ、辞めなくてもいいのに、辞めますと言ったら、ああ、そうと言ったというのは、どの程度なのか知りませんが、それが多少、なんどと思っていましたから、彼女も、もう帰ってこないのだろうと思っていたのですが、でも、そのようにして江角先生というのは、いちずなところがあります。

【司会】ありがとうございました。だんだんいろいろな面が見えて多面的になって、印象が強まったり、深まったりしているのかなと思いますが、他にご質問とかコメントはないですか。ではすき間に、私のほうからお伺いしたいと思います。先生は江角先生と接触なさっていて、江角先生のユーモアセンスと言いますか、そういうものをお感じになったことがありますか。江角先生が、ユーモアセンスのある方だと、そういう意味で面白いなどお感じになったことがありますか。

【山長】江角先生に何をですか。

【司会】おちゃめさんのところがありますか。ちゃめっばいところがありますか。

【山長】ちゃめっばいところ、それはありましたね。先ほどの話でも、生卵をね、ツルツと飲んだらね、ツルツと入ってね、元気が出るとおっしゃったり、それから、これはちゃめっけではないのですが、江角先生はかなり前から総入れ歯、入れ歯をしていらしたのです。時々、がちゃがちゃ、がちゃがちゃしていられっしやるのを見たことがありましたが、私がなんかの用事があって校長室に、そのときは学園長になっていらしたのかわかりませんが、入っていったら外していられしたのです。外していられっしやる、もう口がこうなって、本当におばあさんの顔になるのです。ごめんなさいねと言って、その入れ歯が、ちゃんとした入れ歯をおつくりになればいいのにと思うのですが、なんか合わないのか、痛いんですって。痛いから入れ歯を外すって。

そのときに、私はね、多くの人を傷付けてきたとおっしゃるのです。何を使って傷付けたかという、この口を使って、口でたくさんの人を傷付けた。それをしみじみとおっしゃったのです。だからね、せめてこの歯を入れて痛みを耐えて、償いにしなければいけないと思うんだけど、でも、痛いのよとおっしゃって、そう言われたのを覚えています。確かに江角先生の言葉で、傷付くというのは変ですが、やはりショックを受けたりした人はいたと思いますし、私なんか、やはり2回か3回は、先ほど言ったように、なんかもう、とにかく悲しくて、腹が立って、純心から40分かかけて、がしゃがしゃ怒りに任せて歩いて帰るぐらい腹が立ったことがあります。

いろいろな意味で江角先生というのは、いらしても、いらっしやなくても、たいして影響がないというような、可もなく不可もない方ではなくて、あるときは、すごく江角先生に認められて意気揚々となるときもあるし、あるときは、ぺちゃんこに怒られることもあるし、そういう方でしたから、ご自分も、自分の言葉で悲しんだ人がいるということは、よくご存じだったのです。そのときにそれを感じました。だから、

この口が人を傷付けたから、痛みに耐えなきゃいけないって。そんなに言いながら、外してたから、もごもご、もごもご、やっていたらしたお姿が、今でも目に浮かぶみたいです。だから誰もいないとき、お一人のときには、入れ歯を外していらっしやるときも、きっとあったと思います。私は1回だけそれを、外していらっしやるのは他にも見たことがあります。そういうことを口に出して、聞きもしないのにおっしやっただのを初めて伺って、ああ、そうなのかと思いましたが、面白い、おかしなところもおありでしたね。

【司会】他にはございませんか。

【小島】こども学科の小島と申します。本日は大変、素晴らしいお話をありがとうございました。

【山長】いえいえ、もうそんな、お恥ずかしいです。

【小島】先ほどのお話のなかで、江角先生の原点が学問とキリスト教と原子爆弾とお話しされていたのですが、江角先生と原子爆弾の関係について、少し教えていただければと思います。

【山長】江角先生となんですか。

【小島】原子爆弾。

【山長】ああ、原子爆弾ね。8月9日は、純心の夏休みにもかかわらず、登校日になっているのです。長崎市内、純心は爆心地から近いのですが、私が通った学校でも、純心と同じく、三菱の兵器工場で、純心の生徒と県立の女学校の子と一緒に働いていて、一緒に亡くなっているのです。自宅が、純心は浦上方面が多いので、純心のほうが犠牲者は多いのですが、よその学校もあるのですが、純心のように夏休みなのに登校日にして、学校行事として慰霊祭をやるとい学校はないと思います。私も終戦後、引き上げてきて、県立高校に編入しましたが、ただの1回も、その原爆なんかというのは聞いたことがありません。だから純心はそういう点では、やはり原爆の犠牲者というのをとても大事にしている。

しかも、江角先生、これはどこまでが本当なのかわかりませんが、勤労働員で女学生は作業に行っていましたね。保護者の方から、作業場をどこかに変えてくれと言われてたけれども、そんなことを戦争中にわがままを言うものじゃないと言って、そのままにして聞かなかったのです。そしたら、その行っているところが被爆して、そのお子さんが死んで、親御さんのおっしやるとおりに、そこから違う地点に移していたら、その子は亡くならなかったかもしれない。そう思うと、私はつらくてねとおっしやっして、そういう意味でのことは聞いたことがありますが、原爆そのものについてあまり伺ったことがないですね。慰霊祭のときにも、亡くなった方の霊を慰めるということはあるけど、原爆そのものについてはあまりないですね。

これはこのあいだ、長崎は明治維新の前後から、長崎でいろいろ活躍をした女性というのが、表れている人、うずもれている人、いろいろありまして、それを研究するのに、女性の歴史で、女性史会というのがあるのですが、純心に元勤めていらした社会科学の、もう私のだいぶ先輩の方がそのメンバーで、私も誘われてそこに入っているのですが、そこで女性史の他に、いろいろ長崎のことも研究したりするメンバーがいて、純心が原爆を怒らなかったのかということをお話しなされた方がありました。原爆を怒らなかったのか。永井先生の話によると、これは神様にささげる、燔祭という言葉を使っていると。それは神様に燔祭、ささげるという意味で、何も人間のした悪ですね。アメリカが原爆を落としたと。人間の犯した悪についての憤りもなんにもないということを散々言う方がいて、そういう意味では、原爆を落としたアメリカを憤ったりなんかするという声は、あまり純心では聞かなかったなという気はするのです。

ただ、原爆を肯定していらしたわけではないと思うのですが、原爆で犠牲になった方について悼む声はたくさん聞きましたが、原爆そのものというのは、あまり聞かなかったと思います。それが江角先生のどういう心からきているのか、あるいは戦争を引き起こした責任というところまでさかのぼっていろいろなことを考えていらしたのか、ちょっとわかりませんが、それは私もわかりません。

【司会】ありがとうございました。そろそろお時間もくるようでございますので。直接に先生のお話と関わるかどうかわかりませんが、図書館にも「純女学徒隊殉難の記録」という本がございます。そのなかに江角先生もいくつかお書きになっておられますので、そういうのもご参考にはなるかなと思います。山長先生の直接の印象としてのお話をありがとうございました。本当に先生、時間いっぱい、私たちのいろいろな質問に応じていただきまして、ありがとうございます。最後にキリスト教文化研究センター所員の獅子目教授のほうから、お礼の言葉をお願いしたいと思います。

【獅子目】僭越ではございますが、キリスト教文化研究センターの職員、所員ということで、お礼の言葉を述べさせていただきます。先生には、本日のご講演、そして懇談会と、長時間、誠にありがとうございました。先行き不透明な時代が続いておりますが、学園を取り巻く状況にも厳しいものがございます。このようなとき、山長先生には、学園の創始者である江角ヤス先生のお人柄や、学園への思い、草創期のご苦労等をお話いただきました。洞察力、企画力、行動力、忍耐力、生徒を思う気持ちの強さ、職員を育てる力、本物を見つめなさいという言葉、あるいは人様を大切に、人様に奉仕するという愛の深さ。一方で、理不尽とも思える叱り方、しかしそのあとのフォロー、憎めない方、おちゃめで、率直で、正直で、かわいらしい方、まさに江角先生のそばで薫陶を受けられた山長先生の実感のこもったお言葉、それを通して江角先生

の豊かな人となり、そしてまた、教育者としてのすごさ、神様から与えられた使命を一途に果たしてこられた人生が、面識のない私どもにとりましても、ほうふつとして浮かんでまいりました。桜の下で、山長先生と江角先生との出会い。上等、上等と、声をかけられた、そのお言葉、まさに一幅の絵を見るような感じがいたします。神様のお導きだろうと思いますし、そしてまた、ここでこうして山長先生から江角先生のお話を伺う、これもまた、神様のお導きであると感謝しているところでございます。

実は、お話を伺いながら、「創業守成」という言葉が浮かびました。中国の唐の皇帝、太宗が、「創業」すなわち、国家統一事業を興すことと、「守成」、それを守り、維持していくことと、どちらが難しいかを臣下に尋ねた故事に由来します。太宗は、こう締めくくりました。「創業の難きは往けり。守成の難きは、方に諸公と之を慎まん」、つまり、創業の困難さは、すでに過ぎ去ったこと。過去のものである。今後は、みんなと一緒に守成の困難さを乗り越えていこうではないか。そういう話でございます。私たちは今、まさに守成に関わる者として、その困難さを克服していかなければなりません。そのためには何よりも、創業の困難さに思いを馳せることでございます。

その困難さを克服してこられた江角先生をはじめ、草創期の山長先生をおはじめとする皆さまの熱い思いやエネルギー、一体となった取り組みに学ぶことだろうと思います。守成といえども、そこに進取の気風が必要でございます。時代の変化に柔軟かつ、果敢に対応していかなければなりません。しかし一方で、江角先生が目指された学園の理念や精神は、不易のものとして時代を超えて変わらない、学園の教育の本質として、しっかり保持していかなければなりません。今後とも、私ども江角ヤス先生を指標としながら、学園の不易と流行を正面から見つめ、学園としての確かな組織文化を構築していかなければならないと考えております。山長先生のご講演をお聞きしながら、再度、気持ちを新たにすることでございました。言葉は足りませんが、率直な思いを述べさせていただいて、お礼の言葉に替えさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。

【山長】このような、こんな高いところにおいて、穴があったら入りたいような、そして江角先生が、山長さん、あなた何やってるのって、うしろで笑っていらっしゃるような気がして、本当にお恥ずかしゅうございます。ただ、こうして江角先生のことをずっとこの2、3カ月間、いつも以上に考えざるを得なかったわけです、今日のために。そのことと、そして今日、ここにお集まりの皆さま方と一緒に、江角先生のことを共に考える時間が持てたということに対しては、本当に感謝いたします。そういう意味で、本当に至らない話でしたのに、ご清聴くださりまして、本当にありがとうございました。

【司会】では先生、また控え室のほうへどうぞ。みなさま、もう一度、拍手でお送りください。

拍手 （終了）